



2009.3.15
155

編集 樋口 みな子

E-mail
minginga@agate.
plala.or.jp
郵便振替
「銀河通信」
02740-7-56535
(6号分1,000円)

読者に支えられてゆっくりと歩いて いきます



1月31日に銀河通信20周年を祝う会を実行委員会の方たちが中心になって開いて下さりました。札幌市内はもとより、遠く東京や、秋田、登別、夕張などから50人近くの読者が集い、温かい言葉をいただき感謝の気持ちでいっぱいです。

21年前、20人の読者で始まった銀河通信が250人の読者になるとは想像もできませんでした。最近山の話が多いですが、平和や、

身近な自然、人権を守る活動なども伝えてきました。いろいろな分野で活躍する人たちと出会えたのが私の大きな財産になりました。世話人代表の小野有五さんは「20年はすでに一つの人生 山裾からの長い道をひたすら歩き続けていつかたどり着いた高い独標のような尊い静かな到達点」と詩に託して下さいました。

文才のない私が書き続けることが出来たのは読者の励ましでした。自然探索が好きになったとおっしゃる方、映画の紹介に惹かれて見たよというメール。本を取り寄せて読みましたという方。ちまたにはたくさんの情報があるのに、こんな声に元気づけられました。20年も続けてくると、少し私もくたびれましたが、伝えることがある限り、また何でも見てみたい、聴いて見たいという好奇心が失われない限り銀河通信を発信したいと思っています。

最近、雑誌などの休刊や廃刊が続いています。生活が厳しくなると文化にはお金をかけられないという人たちが増えますね。でもこんな時代だからこそ、ささやかな通信を発信していく意味があるのではないかと思います。今まで通り、気負わず、自然体で書いていきたいです。

これからもご愛読いただけますようお願いいたします。



最年長の読者、高野ケイさんはいつもプロジェクトXになつては駄目と20年間励まし続けて下さりました。

写真・三田英二さん

冬山遭難防止講習会に参加しました

ニセコなど最近冬山での事故が多く、胸が痛みます。山メーリングリストの仲間で「冬山で吹雪になった時、遭難しないで無事に帰ってくるにはどうしたらいいか講習があったらいいね」と誰からともなく声が上がりました。そんなメンバーの思いから開催の運びとなり、2月28日～3月1日の2日間、ニセコのチセヌプリでの講習会に参加しました。

無意根山、積丹岳、ニトヌプリからの教訓からどうすれば遭難を防げたのか、また少しでも早く遭難者を発見し救助するにはどうしたらいいのかを学びました。講師は雪崩を検証する会代表の小笠原実孝さん（雪崩研究会会員）です。



1日目、チセヌプリスキー場を上ったところでピーコンで遭難者の発見訓練とV字コンペアー方式による埋没者の掘り出し方法を実習しました。

ベルトコンペアー方式とは（下左写真）ゾンデ棒の中心から傾斜のある方向にV字型に掘り下げて行く方法です。埋没者の気道を確保するのに有効だそうです。

ビバークせざるを得ないときに雪洞を掘る体験ではふたり一組で実施しましたが、ゆったりとお茶を飲むスペースがある大きな雪洞あり、ふたりやっと座れるぐらいの大きさの雪洞ありと、体力の差が歴然としました。私は力がなくて小さめ。それでもお湯を沸かし、カップめんであっただけでした。自宅周辺で雪洞掘りの練習をしなくてはと課題ができました。



翌日はニトヌプリの雪崩現場を検証するために14人でスキーで登りました。斜面が30度近くあるところでは必ずピットチェック。霜ザラメ雪、あられの層がないかを確認しました。今回は新雪でしたが、可能な限り斜度を低く、大木のある斜面を選びジグを大きく切らないことなどを学びました。小笠原さんは、スキーはかなり上手ですが、「ピットチェックもしないで大斜面を楽しもうとするのは掟破りだ」と言います。アクティブチェックの方法としてストックを刺して雪の深さを確認したり、ジグを切ったその上の50cmでジャンプして崩れないかを確認など、たくさんの山に登った人ならではの実践的な講習でした。

小笠原さんは、キロロからニセコ方面全域の南東斜面が要注意と強調しました。この斜面は2月11日以降に降ったあられがまだ威力をもったまま雪下に潜んでいるとの事です。

悪魔にミスを突かれられないように、これからの山行に生かし、安全に登山を楽しみたいと思います。

ニセコ山荘での夜の懇親会が楽しかったです。私は今年はさっぱり山に登る機会が少なく久しぶりに本格的な山登りでした。

（写真提供・仲俣善雄さん）



スコップを使ってのピットチェック

日本の隔離政策の犠牲に

粗末な火葬場跡と掘っ立て小屋に衝撃

樋口 みな子

ハンセン病回復者と北海道をひすぶ会(札幌市)の会員5人である月下旬、台湾の楽生院を訪問しました。

日本統治時代の影

台湾では日本統治時代にハンセン病患者の強制隔離政策が始まり、戦後の国民党政府もこれを継承したため、1962年まで隔離政策が続いていました。

2月22日、台北市街から車で30分ほどの楽生院(谷北區新莊市)を訪ね、入所者の自治組織、自救会理事長の李添培さん(74)にお

話を聴きました。

李さんは1949年、14歳のときに楽生院に入所。以来60年をここで暮らしてきました。結婚もし、2人の娘の1人は結婚して社会生活を送り、孫もいます。今はもう1人の娘と一緒に暮らしています。

79年前に日本人によって建てられた楽生院は、レンガ1つ、瓦1枚に至るまで入所者自身の手によって修繕され、今日に至っています。李さんらは人生の大半をこの楽生院で暮らし、ここを終の棲家として人生を静かに全うしたいと望んでいます。入所者が1200人いた時期もあったそうですが、現在は264人になりました。入所者の平均年

齢は80歳といます。

蔑ろにされる人権

2005年に地下鉄倉庫建設工事のため、療養所を強制撤去するという問題がおきました。新ビルに全員入れるという計画です。政府の政策に抗するために自救会が結成されました。裁判で闘い、入所者の意向は尊重されることになりました。しかし8割の入所者は新ビルに移り住みましたが、新ビルへの入居を選択しなかった人々は、いままで住んでいたプレハブや、他の目的に使われていた建物を住宅用に改修したりして住んでいました。保存が決まった建物の補修工事も始まっています。

ハンセン病療養所 台湾・楽生院を訪問して



李添培さん(左から4人目)を囲んで。右端が筆者、隣が岸上さん

一員、入所者の権利は守られているようですが、台湾行政院(内閣)がハンセン病の元患者に対し、差別と偏見を生むなど過去の政策に誤りがあったとして公式に謝罪したのは、今年2月12日のことです。

地下鉄倉庫の工事は昨年秋から本格的に進められています。楽生院に隣接した崖の斜面にトンネルを掘る予定で、李さんらは土砂崩れが起きるのではないかと不安を募らせていました。

入所者の深い絆

山に囲まれた広い院内は坂道で、新ビルを選択しなかった人々は、車動のスクーターを上手に運転して買い物や用事を足していました。教人の入所者が、木陰でお茶を飲みながら談笑している姿から、入所者同士の深い絆を感じました。

衝撃を受けたのは、山道の奥にしつらえた、現在は使われていない粗末な火葬場と、死者を自送る掘っ立て小屋でした。どんなにか無念で寂しかったことか胸が詰まりました。自由に生きる事のかけがえのなさを実感しました。

北海道民医連議員の岸上利光さんも年休をとって参加しました。自分たちの医療を外側から見るとも大切なことだと思います。患者さんの身になって考えるとはどういふことなのか、楽生院の人々が教えてくれたように思います。(フリーライター・江別市在住)

冬の旅行にはご注意！

思いもかけず、2月に台湾に行くことになりました。発端はハンセン病回復者と北海道をむすぶ会のメーリングリストで、台湾の療養所を訪ねるという簡単な案内でした。最初、旅行代金の安さに引かれたのです。沖縄位でしたから。それなら行けるかなになり、2月20日から23日までの台湾行きを決めました。安くなるのは平日で、参加者の都合がつかず結局少し高めの旅行代金になりました。3面でハンセン病回復者が暮らす療養所を訪問した記事を書きましたのでご覧下さい。



出発予定の2月20日は全道各地は低気圧の影響で終日吹雪になりました。千歳空港で今か今かと私たちは待機。滑走路で飛行機の雪を払う作業（上写真）が何度も続けられましたがあえなく欠航となりました。

大喜びしていたのは台湾の修学旅行生たち。雪が珍しくカメラのシャッターを何度も押していました。

自宅に帰るには遅すぎるし、みんなで「困ったね、ホテル代がかかるね」とがっかりしていたら、ホテル代は航空会社が負担するということになりホッとしました。苫小牧のホテルに着いたのは夜中の11時近くでしたが快適に眠ることが出来たのは良かったです。夕飯のお弁当も出ました。搭乗手続きを再度して、翌日ようやく飛行機が飛んだときはホッとしました。



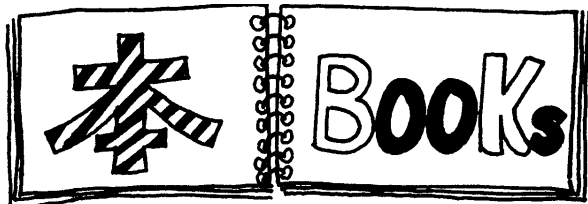
中華民国山岳協会の元国際部長の張玉龍さん（右）は76歳の現在も元気に山に登っておられます。陣淑貞さん（中央）は陽明山国家公園解説員として活躍。自然観察の先生です。

スノーハイキング

銀河通信20周年を祝う会にはるばる東京や秋田からいらしてくださった友人と3月1日、スノーシューで多峰古峰山（タップコブ）に登りました。

スノーシューは平地でしか歩いたことがないと話すN子さん。急斜面をぐいぐいと登れるのに感激していたのが印象的でした。スノーシューも自前です。用意がいいですね。北海道の山を楽しんでもらえて私も嬉しかったです。





「悼む人」 天童荒太著

文芸春秋 1700円



毎日、事故や事件で多くの方が亡くなっています。どの人にとってもかけがえのない人生であったことに思いをはせていただろうかこの本から考えさせられました。

著者は2007年の同時多発テロの頃から、7年の歳月をかけて、悼む人を書き上げました。

他人の死を悼む静人が主人公です。「ぼくは亡くなった人を、ほかの人とは代えられない唯一の存在として覚えておきたいんです」と静人は語ります。彼は三つのことに深い関心を寄せます。亡くなった人は誰に愛されていたのか、誰を愛していたのか、そしてどんなことで人に感謝されていたのかということを知り続けるのです。

静人がどうしてそうせざるにいられないのかは本人にも説明しがたい。その行動は不可解で、偽善者と呼ばれ、怪しげな新興宗教かと警戒されます。彼のノートには新聞記事で知った亡くなった人の知りうる限りのメモが記されていて、全国を放浪しながら、交通事故や、殺人、火事や災害で亡くなった人々を等しく悼んで歩きます。

この物語には三人の視点から静人が描かれます。人生にすねたルポライター、夫を殺害した罪で服役し出所したばかりの女性、末期がんに侵されて余命いくばくもない静人の母です。静人の姿は三人を映す鏡のようで、自分の人生を深く見つめます。自分らしく生きたいと最期の日まで貫いた、静人の母巡子と家族の絆が静人を支えています。静人の行為を通して愛や死に対する考えが問い直されるのです。

私も静人が最初は理解しがたく何故？という疑問ばかりが先に立ちました。読み進むうちに、私も家族や両親、周りの関係などを考えさせられました。

私はこんな風に深く人を悼んだことがあったらどうかと自分を恥じる思いでいっぱいになりました。家族、父母、身近な人たちがいとおしく思えました。

軽い小説が多い中で、現代という時代を見据え、悲しみと苦悩を深く意識した作品として、お勧めします。「永遠の子」などの名作がありますが、寡作で知られます。社会性のあるテーマを深く掘り下げた作品はいつも心に残ります。

今回、直木賞を受賞しましたが、亡くなった友人たちのことを思い浮かべながら読み終わりました。

「在日一世の記憶」 小熊英二・姜尚中 編集英社新書 1680円

戦後、解放後を生き抜いた在日一世コリアン52人の魂の証言集です。新書だから薄い本と思っていたら784ページもの大書です。

民族団体の活動家、文学者、ハングルソフトの開発者、サハリンからの引揚者、被爆者、歴史学者、海女、焼肉屋、協会関係者等々。激動の半生を生き抜いた在日一世の力強さに圧倒されました。

自らも在日二世である姜尚中氏は「在日一世と聞いて、多くの日本人はどんなイメージを持つだろうか」と問いかけます。

朝鮮半島に生を受けながらも日本の植民地政策に起因して、日本に渡ってそのまま残留せざるを得なくなった人々は、祖国の分断、被差別という受難のなかを生き延びました。特に女性はたくさんの子どもを生き育てながら、朝早くから夜遅くまで働いた当時を表現豊かに生き生きと語っています。膨大な聴き書きは貴重な歴史の証言です。

姜氏は「在日二世の私には、彼ら在日一世たちの証言はあたかも私の歴史の一部、私の血となり、肉となった歴史の一部を語っているように思えてならない。なぜなら彼らは私の父であり母でもあるのだ」と書いています。

阪神大地震で被災し、仮設住宅から夜間中学に通い、学ぶ楽しさを味わい、さらに夜間高校を卒業した女性の証言が印象的でした。これだけまとまった在日一世の証言は聞いたことがなく、二人の編者の熱意に敬意を表したいです。歴史的資料として読まれるだけでなく、現在から未来に求められるものになって欲しいとの願いが込められています。





「四国八十八ヶ所 わたしの遍路旅」

石川文洋著 岩波新書 1000円

石川文洋さんは、ベトナムやカンボジアなどで戦場カメラマンとして活躍してきました。

日本縦断徒歩の旅をやりとげた石川さんは今度は四国遍路へ。戦禍に巻き込まれた人々、とりわけ、ベトナム、カンボジアで倒れたジャーナリストらへの鎮魂の旅でもありました。

途中、心筋梗塞で倒れ、集中治療室に入院しますが、それを乗り越えて結願を達成させました。退院から半年、歩くりハビリを重ね再び遍路にと旅立つのです。心臓停止からの蘇生という体験をして、結願とお礼参りはあらためて生命の大切さを身にしみて考えさせられる旅になったといいます。

心筋梗塞であっても歩くことはいいのですね。同じ山岳会の会員の医師からも同様の体験を聞きました。

石川さんは讃岐の旅から帰って検査を受けたところ、44%しか機能していなかった心臓が62%働くようになっていたそうです。壊死した心筋は治らないけれど、休んでいたほかの筋肉が働くようになったのは歩いた成果でしょう。心筋梗塞でうつになる人も多いそうです。是非、石川さんのように体と相談しながら歩いて欲しいです。

四季の鮮やかな自然と行きかった人々の素顔が自然でとてもいいです。自然を今まで以上に新鮮な気持ちで見ることができたと書いています。四国遍路は、戦場で亡くなった友人たちと再会と対話の旅になったようです。きっと天国から石川さんの旅を見守ってくれていたのではないのでしょうか？心に刻むという豊かな時間を私も持ちたいと思いました。

この本も偶然ですが悼む旅の本でした。

「人生読本 落語版」 矢野誠一著 岩波新書 700円

私は落語から多くのことを教えられた。けっして世のため、人のためにはならないが、貧しいながら楽しく人生を送るすべを学んできた。古今亭心志ん生がしばしば口にした「こんなこと学校では教えない」の一言はまさに教育の妙諦でその意味でも八代目桂文楽、五代目柳谷小さんなどなど綺羅星のごとくならんだあの時代の寄席は私にとって最高の教室だった。（はじめにより抜粋）

この文章に全てが集約されていると思います。

私がこの本を読むきっかけは、銀河通信20周年を祝う会で小野有五さんが披露し

た落語でした。おなじみの「寿限無」は無病息災をまっとうして欲しいと願う親心に、お和尚さんがとてつもなく長い名前をつけたことから引き起こされる騒動を噺（はなし）で聞かせるのですが有五さんは見事によどみなくしゃべり会場は拍手喝采でした。

ギスギスした世の中です。落語のピリッと辛いユーモアには、現代人が忘れた素朴な真実がぎっしり詰まっているようです。私はテレビのお笑いがどうも好きではありません。平気で人を叩いたり、茶化したり。何が面白いのだろうと思います。落語は自分にも思い当たることのあるなとクスリと笑わせるところがいいですね。

著者は、たくさんの落語の一節を紹介しながら「暮らしの知恵そのもので、しかも教わったことですぐ、世のため、ひとのために役立つようなことではないのが尊いと思う」といいます。含蓄のある言葉ですね。

ハウツー物ばかりいが全盛ですが、じわりと心に届く先人の知恵を盛り込んだ落語の世界に触れてみたいと思いました。



「患者さんの心によりそって」松浦侯夫追悼集

松浦侯夫先生追悼制作委員会

2005年、57歳の生涯をとじられた北海道民医連の医師、松浦侯夫さんの追悼集です。

50人近くの間僚や、友人、患者さんなどが松浦先生の思い出を語っています。私は残念ながら仕事で接する機会はありませんでしたが、患者さんの心によりそい、最後まで、真摯に生き抜かれたことをこの追悼集から知り涙を禁じえなかったです。

編集後記に福原先生が「院長のような目立つ役職になったことはないけれど、常に患者さんと力尽きるまで向き合い、臨床医として生き抜いた松浦先生の生きた証を何らかの記録として残したい」との思いで追悼集作りに取り組んだことが記されています。また患者さんの話を粘り強く聞き、患者さんが納得するまで説明したというエピソードが綴られています。

私も松浦先生の診察を受けて見たかったです。研修医への胃カメラ練習台になって自らの胃がんを発見して、胃の全摘を行っていました。もっともっと長生きして欲しかったです。長身瘦躯で静かでひょうひょうとした雰囲気印象的でした。患者さんの心によりそって診察を続けた先生の遺志を多くの医療人が受け継いで欲しいと思います。



映画



『そして、私たちは愛に帰る』

「そして、私たちは愛に帰る」

(ドイツ・トルコ) ファティ・アキン

監督

男手一つで息子を育て上げ、余生を娼婦と暮らす父と大学教師の息子、トルコからドイツに出稼ぎに来て娼婦になった母とトルコの反政府活動家の娘、そしてドイツに逃げてきた彼女に共鳴し助ける女子学生と「

人生を無駄にするな」と怒る母。3組の親子が思わぬところですれ違い巡り合います。

ドイツとトルコ、2000キロに渡ってそれぞれの人生の旅路をさすらいながら、愛と希望を見出して行きます。

理解しあえない親子、異邦人としての孤独感。トルコとドイツ双方の国のそれぞれの文化、社会問題、生活状況の違いがぶつかり、生き方が模索されていきます。

人生の不幸と幸福が背中合わせであることを、この映画は見事に切り取っているのです。

愛する娘を失った母が、反政府運動をする娘に手を差しのべるシーン。イスタンブールでドイツ語専門店を営むことになった息子が父に会いに向かう海辺のシーンなど死から生が生まれていくさまが淡々と描かれます。残された者が、悲しみを乗り越えて、愛と希望を見出して人生って捨てたもんじゃないなと心がふわりとあったかくなりました。

購読料の振込みにご協力ください

購読料をありがとうございます 1.16
~ 2.25

年6回の発行で印刷と送料で180,000円かかります。郵送の読者180人でぎりぎりの予算です。今回、振込み用紙を同封しました。年間1000円の振込みにご協力ください。またたくさんのカンパを寄せてくださった読者にも振込み用紙を入れました。ご協力いただける方はお願い致します。昨今の経済事情の悪化で振り込まれる方が少なくなりました。購読しない方はお知らせください。また自宅で眠っている昔の切手はないでしょうか？私も今までたまった60円切手や62円切手などを有効活用しています。購読料を切手で送ってくださってもありがたいです。よろしくご協力お願い致します。

印刷機が不調のため、今号から印刷屋さんをお願いすることにしました。編集した原稿をお渡しします。

佐々木純一(雨竜町) 小野寺則之(小樽市)
) 河村健(札幌市) 新井喜美子(北広島市)12号分 カンパも含む山影静子(夕張市)5000円 檀山菜津子(札幌市)10000円 関口興洋(北九州市)3000円 武田一生(岩見沢市)5000円 桑原富貴子(むかわ町)バックナンバー代と共に2000円
合計 30000円は印刷と送料に使わせていただきます。ありがとうございます。

20周年を祝う会でいただいたご祝儀等は案内の葉書や、メッセージ集などに使いました。ありがとうございました。

江別の主婦 道内外にファン250人



年を
年を

20周年を祝った個人通信を祝う会であいさつする樋口さん

江別市野幌若葉町の主婦、樋口みな子さん(59)が発行してきた「銀河通信」が、創刊以来20年を迎えた。道内外の約250人のファンは、毎月のように届く便りを心待ちにしている。

第1号は1988年7月、モノクロのA4判1枚でスタートした。病院事務の仕事と育児の合間に、家庭内の出来事や旅行の感想などを書きつづり、それに中学校教師の夫がスケッチを添えた家庭通信だった。子どもが成長するにつれ、関心は家庭から自然環

テーマ広げ環境問題まで

へ、派遣社員解雇への思いなどが、美しいカラー風情など10枚の写真とともに掲載されている。

札幌市で開かれた20周年を祝う会には、山の仲間や作家ら約50人が駆けつけた。代表世話人の小野有五・北大教授は「20年と一口に言うが、山麓からの長い道をひたすら歩き続けてたどりついた高い独標のような新しい到達点」と称賛した。

樋口さんは「元気が限り続けていきたい」と支えてくれる夫や仲間感謝している。

個人通信たゆまず20年

文化を伝える人の紹介
インタビュー
訳、映画
書評、映画

2009.1.12 第154号

個人通信 20周年記念号

「銀河通信」20周年記念号

手書きの創刊号(右)と最新の154号

環境破壊がすすんでいることに危機感を
感じ、身近な自然の輝きを
訴えるようになった。

通信を出す傍ら、日本山
岳会北海道支部の会員にな
って道内外の山に登った
り、北海道高山植物盗掘防
止ネットワーク委員会事務
局長を務めたりするなど、
活動の場を広げてきた。

最新号の154号は4

20周年が新聞記事になりました。読売はあまりに大きな紙面に遠惑いました。文中にある事務員は間違いで正しくは臨床検査技師です。また朝日に載った写真は緊張のあまり自分らしさが出ていない写真でしたので、銀河通信を読んでみようと読みませんか？と記者さんには聞いてもらいたかったです。

映画もたくさんは見えていませんが紹介したい映画が少なかったです。ニコールキットマンの話題作「オーストラリア」も見ましたが、期待はずれでした。前半は「風と共に去りぬ」のような壮大な風景や展開も良かったのですが、先住民のアボリジニの描き方に不満を持ちました。どうもオーストラリアの観光用に作られた映画のようでした。

山のトイレルを考える会のフォーラムがありました。そのことも伝えられたのですが紙面が尽きてしまいました。ただ、10年の山トイレルの活動は全国に広がっているようです。続けること大切さを学びました。(みな子)

2009年(平成21年)2月10日

個人通信 地道に発行21年目

「個人通信」21周年を祝う会が、2月10日(日)に札幌市野幌若葉町の野幌若葉町公民館で開かれました。主催は「個人通信」の発行を続ける樋口みな子さんです。

当日は、個人通信の発行を続ける樋口みな子さんが、20周年を祝う会を主催し、21周年を祝う会を開催しました。当日は、個人通信の発行を続ける樋口みな子さんが、20周年を祝う会を主催し、21周年を祝う会を開催しました。